家島諸島 2025

2025 年 2 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

2 月の末、兵庫県姫路市の沖に浮かぶ家島諸島に友人と 1 泊 2 日の旅をしてきた。2 つの島を探索し、島で獲れた海の幸を堪能してきた。

■家島諸島へ

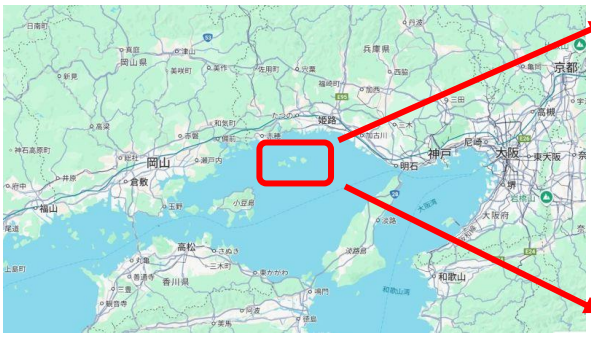
最近の私は好んで島の旅をしている。その理由は、島はゆっくりと時間が流れていると感じることから“島時間”と呼ばれるのんびりしている面があり、そして都市化が本土に比べて遅いので昔のものが多く残っているからだ。もちろん食べ物は地産地消で、新鮮な魚貝類を堪能することができる。

今回、私は姫路と小豆島の間の瀬戸内海に浮かぶ家島諸島に目を付けた。

家島諸島は兵庫県姫路市に属しており、4 つの有人島がある。それらは家島（いえじま）、坊勢島（ぼうぜじま）、男鹿島（たんがじま）、西島（にしじま）で、4 島合わせて約 4000 人の人が住んでいる。

当初は 4 島全部を巡ろうと計画したが、アクセスが悪く男鹿島と西島は諦めることになった。

私は友人と姫路駅で待ち合わせをして姫路港から家島に渡る。友人は地球一周の船旅で知り合った関西在住のヨットマン横さん、海と酒をこよなく愛する男で、家島には何度かヨットで立ち寄っているというから今回の旅の相棒にピッタリだ。



【家島諸島の位置】

【家島諸島】

■家島を回る

私たちは人口が最も多い家島の真浦港に上陸する。まずは電動アシスト自転車を借りて、島内一周のサイクリングに出発する。

島なので道はそれなりに狭い。狭いうえにアップダウンが結構きつくて電動アシスト自転車にして正解だったようだ。

港の周辺を走るっていると、漁船よりも貨物船が非常に多く係留されている。横さんは「西島と男鹿島から切り出された石が家島に集められ、その後運び出される。それらの船が多く往来するから造船や船修理も盛んだよ」と、さすがに良く知っている。

切り出した石は大阪などにそのまま船で運べるから、陸路よりも重宝される。

【家島の貨物船係留風景】

島の北東の端の高台に「家島神社」があり、100 段以上の階段を登ると本殿がある。誰もおらず、ひっそりと静まりかえっている。

看板には「神武天皇が大和に向かう途中にこの島を訪れ、湾内が家にいるように穏やかなので家島と名付け、海上安全と戦勝を祈願された」と書かれている。

【家島神社】

関東に住む私にとってこれを非常に珍しい。関東各地には日本武尊（ヤマトタケル）が紀元後2～3 世紀に東方遠征をした伝承が多くあるが、さすがに神武天皇の伝承は関東にはない。

神武天皇は言わずと知れた初代天皇で、即位は紀元前 660 年 2 月 11 日と言われている。この年号の信憑性はともかくも 2 月 11 日は建国記念日で国民の祝日になっている。その意味では多くの国民が恩恵を受けていると言ってもいいだろう。

それにしても大和、おそらく現在の奈良や大阪へ戦に行く途中ということは、いったいどこから来たのだろうか。鬼退治伝説のある山陽か、あるいは九州か、ひょっとしたら外国かもしれない。天皇家のルーツや邪馬台国論争にも影響しそうだ。

やはり島には古いものが多く残っている。だから島の旅は面白い。

家島神社の近くに「清水公園」という殺風景な公園がある。ポツンとベンチが置かれているだけの公園で、そのベンチに横さんと 2 人で座って海の向こうにある西島を眺める。

西島は石の採掘のために山肌が削られていて痛々しい姿をさらしている。さすがに神武天皇はこの痛々しさを見てはいないはずだ。

西島は家島諸島 4 島で最も大きい島だが、島民は 4 人しか住んでいない。ただそれは 2020 年の調査だから現在はどうなっているのかわからない。

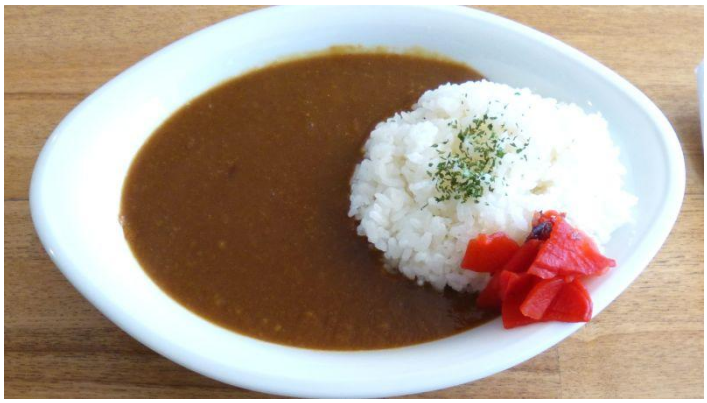
【清水公園から西島を見る】

■洒落たカフェで昼食

家島をぐるりと回って真浦港に戻ってきて、海が見える洒落たカフェ「スコット」で昼食をとる。

私は海老カレーを食べる。店主の説明では、地元で獲れたアカエビを小さく刻んで擦り潰して煮込んでいるという。具が何も入っておらず、至ってシンプルで全く見映えのしない珍しいカレーだが、濃厚な海老の味がたっぷり味わえる逸品だ。

海老アレルギーの横さんは地元で獲れた真鯛のフィッシュ＆チップスを食べている。味見させてもらうと、揚げたて真鯛のフライは実に美味い。海塩とタルタルソースが用意されているが、何もつけなくても、あるいはどちらをつけても美味い。高級魚の明石鯛はこの近くで獲れるから、ここで獲れる鯛もほぼ明石鯛と言ってもいいだろう。本場イギリスのフィッシュ＆チップスよりも遥かに美味い。



【具がない海老カレー】

【真鯛のフィッシュ＆チップス】

■坊勢島

坊勢島に渡る。坊勢島は 4 島で 1 番小さいが、人口は 2 番目に多い。島内は歩いて 3～4 時間で一周できるから、今度は自転車を借りずに歩いて島内探索に出かける。

小さい島だから平地が少なく、家々は斜面の狭い場所に建っている。従って道が狭く、軽自動車も通れない路地が多い。それに加えて坂道が多いから、オートバイが島民の足になっている。

驚くことは漁船の数が非常に多いことだ。家島とは対照的に小さな漁船ばかりが、所狭しに係留してある。漁業協同組合は 1 つだろうが、係留する入江の数は多く、至る所に漁港があるという印象だ。

【坊勢島の漁港】

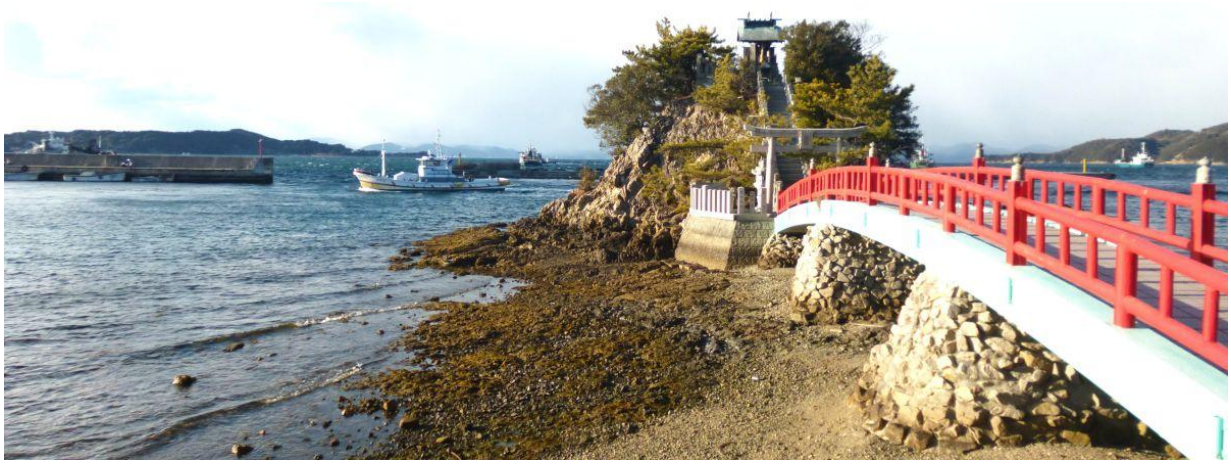
珍しい船がある。船というよりも家のようにも見える。近寄ってよく見ると、それは海に浮かぶレストランになっている。いやレストランというほど立派なものではなく、どちらかと言えば掘っ立て小屋と言った方がいいだろう。部分的に 2 階建てで、2 階部分にはテラス席のようなものがある。

残念ながら今は営業していないが、観光シーズンになれば店を開けてテラス席で魚貝類の BBQ などを食べることができるのだろう。

【海に浮いている掘っ立て小屋風レストラン】

漁が盛んなので豊漁と安全を祈願する神社「弁天島 海神社」がある。小さな島の上には小さな神社がある。島には橋が架かっており、橋はなだらかな弧を描いている。その橋の塗装はカラフルに塗り替えられていて、まるで龍宮城に行くような実に良い雰囲気を醸し出している。

この小ぢんまりとしたサイズも雰囲気も坊勢島にぴったりだ。



【弁天島 海神社】

海辺を離れて少し内陸部に入ると公園のような場所があって、珍しい供養塔が建っている。そこには「猪供養塔」と書かれており、まだ新しいから最近立てられたらしい。

理解し難いのは猪供養塔の近くには猪を捕獲する罠が仕掛けられている。罠は鉄格子で出来ており入口は 1m×1m ほどで奥行 3m くらいある。罠の中には猪の餌が置かれているから現在も使われている罠ということになる。

供養するくらいなら捕獲しなければと思うが、そうはいかないらしい。坊勢島は狭いから山と人里が近く、そのため猪による被害が多いのだろう。だから猪を捕まえて殺処分して、シシ鍋にでもして食べるのだろう。そのゆえ供養塔と罠の共演という珍しい光景が生まれた。

【猪供養塔と猪の罠の檻】

■男鹿島を臨む

島の北半分は人家や漁港が多いが、南半分は山が多い。その中で一番高い標高 69m のかしわ山の頂上の「かしわの山展望台」に登る。

実に気持ち良い景色が広がっており、西に小豆島、南に四国と淡路島、東には男鹿島が見える。男鹿島は西島と同じように石が切り出され無残に山肌をさらしている。

【中央奥に見えるのが男鹿島　手前は坊勢島の漁港のひとつ】

実は当初は男鹿島に泊まるつもりでいた。友人の知り合いがやっている民宿が男鹿島にあるというので電話番号を教えてもらい、何度も電話したが全く電話に出ない。友人に確認してもらったら、知り合いは冬の間は宿を閉めて島を離れて生活していることが判明した。

男鹿島は人口 30 人と極めて少ない。その中にその知り合いも入っているとするならば、冬はさらに少なくなる。

男鹿島に限ったことではなく、冬と夏の人口が異なる島は意外に多い。それも半減するような島もあるから、冬の島旅は注意が必要だ。

■宿は貸し切り

島の約半分を巡り終えて、今宵の宿「みなと旅館」にチェックインする。

旅館の主人は 40 代だろうか、気さくな人物で、「お客はお 2 人だけで貸し切り状態ですから、自分の家と思ってくつろいでください」と言っている。神武天皇が「家島は家にいるようだ」と言ったことを意識しているのだろうか。

それにしても 2 人とは、やはり冬は来島者が少ない。だから男鹿島の民宿も冬は閉めている。

一般的に冬の島は遊びや観光にあまり向いていない。そういう目的で島に渡ると肩透かし、いや落胆することも多い。

かくいう私も今までは季節構わずにただ漠然と島に渡っていた。今後の冬の島旅は歴史調査とか、季節の料理を食するというように目的を持って来るべきかもしれない。

その季節の料理が旅館の食卓に所狭しに並んでいる。ホタテ、イカ、鯛、牡蠣の刺身、ナマコの酢の物、イカのバター焼き、海老や牡蠣の天ぷら、どれも島で獲れたものばかりだ。カレイの煮付けは実に美味かった。

【みなと旅館の夕食】

■坊勢鯖のしゃぶしゃぶ

翌朝は少し早めに宿を出て、昨日巡り残した島の北部を海岸沿いに半周する。島の北側は漁港だらけと言っていいだろう。

漁港のやや沖合では牡蠣や海苔の他に鯖も養殖しており、その鯖は“坊勢鯖”として有名だという。横さんは「養殖なので品質管理がしっかりしているから寄生虫の心配もなく、酢でしめることのない鯖寿司、鯖のしゃぶしゃぶが有名だよ」と教えてくれていた。

ただそれを聞いたのが昨日の朝だった。すぐに宿に電話して鯖料理を食べたいと、気さくな主人にお願いしたが、今日の今日ではさすがに準備ができない申し訳なさそう断られた。

ところが幸いにして昨日の島内探索の時に「万福」という食堂を見つけて鯖の話を聞いたら、「鯖寿司は無理だけど、鯖しゃぶならば明日の昼食にはなんとか用意できるよ」と言ってくれた。私は「11 時 50 分の船で姫路に戻るので少し早めに店を開けて下さい」とお願いしていた。

ちなみに鯖しゃぶはメニューには載っておらず、隠れメニューらしい。

そして本日 11 時の少し前、店に入ると鯖しゃぶの準備ができており、船盛の器に大きな鯖 1 匹分の刺身が盛られている。刺身でも食べられるので醤油とワサビも用意されている。

【万福の鯖しゃぶ】

しゃぶしゃぶを食べ始める。鯖特有の臭みがなく脂も乗っていて美味い。これはこの時季に家島諸島にやって来た甲斐があるというものだ。横さんも「こんなに美味いのは初めてだ」と大喜びで食べている。

大きな鯖なので 2 人で食べても充分な量で、ご飯がなくても満腹になるほどだ。

鯖以外に焼き牡蠣も頼んだ。これも絶品で、身が厚くてしっかりしているのに柔らかい。

この店は漁師たちが食べにくるので、新鮮で美味いものをそろえているのだろう。

少し離れたテーブルでは朝の漁を終えた漁師たちが飲んでいる。時々笑い声が聞こえるが、それが実に幸せそうで、とても羨ましく聞こえてくる。

【万福の焼き牡蠣】

■家島諸島で想う

家島諸島巡りって感じたことは各島の役割分担だろう。4 島の玄関口の家島は経済の中心、坊勢島は漁業の中心、あとの２島は生産現場といったところだ。

意図的にそうしたものではなく、結果として偶然そうなったのかもしれないが、これは実に興味深い。ある意味、日本列島の将来を示しているように思える。

言うまでもなく日本は少子高齢化によって労働人口が減少しており、それによって経済の停滞が続く。政府は何もしていないとは言わないまでも有効な手を打てていない。

そんな中、私は友人たちと日本の将来について語ることもあり、様々なアイデアが出てくる。

そのうちの一つ、インフラ整備や行政サービスについては家島諸島が参考になりそうだ。

現在の日本の行政は人が住んでいれば人数の多少にあまり関係なく、それらのサービスを提供している。しかしそれはいずれ困難な状況に陥ることは明白だ。その解決策の一つとなるのはエリア分けで、そのエリアの特性に応じたサービスだけを提供するという方法が考えられる。

それはつまり・・・。

おっと先走ってしまったか。このことは今後追々書いていこう。

■旅の記録

実施は 2025 年 2 月 24 日（月）～2 月 25 日（火）の 1 泊 2 日で、その行程を示す。

・1 日目　新横浜駅 6:00（新幹線）→8:55（雪のため 6 分遅れ）姫路駅 9:20（バス）→
姫路港 10:00（渡船）→10:27 家島真浦港、レンタサイクルで島内散策へ
「家島神社」、「清水公園」、「網手（あで）港」を見物し、
カフェ「スコット」で昼食、「どんがめっさん」、「城山公園間浦古郭跡」見物、
網手港から渡船で坊勢島網手港へ渡り、「みなと旅館」にチェックイン、
坊勢島を徒歩でほぼ半周、「弁天島 海神社」、「かしわの山展望台」見物し宿に戻る

・2 日目　8:20 宿を出て、徒歩で残りの半周、「恵美酒神社」参拝
10:40「万福」で鯖しゃぶの昼食、11:50（渡船）→12:25 姫路港 12:30（バス）→
12:50 姫路駅から新快速で大阪へ、別の旅行（大阪京都の旅）に突入

費用は約 42150 円、詳細を以下に記す。

交通費　23650 円

・JR 交通費　19550 円（横浜⇔姫路往復、姫路→大阪だけ在来線、3 割引）
・島遊び切符　2200 円（姫路駅～姫路港～家島 往復切符）
・レンタサイクル　1200 円（家島）
・船代　700 円（島遊び切符の追加分）

宿泊費　12500 円

・家島みなと旅館　12500 円（1 泊 2 食＋ビール）

その他　約 6000 円

・昼食　約 6000 円（鯖しゃぶ一式 4500 円、海老カレー1500 円、ビール代含む）